

大学の教育改善に向けたカリキュラム・コンサルティングの取り組み

—岡山理科大学の実践について—

山口一裕・大山香織*・重松利信**・山咲博昭***¹・野間川内一樹・秦敬治****

岡山理科大学教育推進機構教育開発センター

*岡山理科大学教育企画部教育企画課

**岡山理科大学教育推進機構基盤教育センター

***岡山理科大学教育推進機構教育開発センター客員センター員

****岡山理科大学教育推進機構

¹広島市立大学企画室

キーワード：質保証、カリキュラムアセスメント、カリキュラムアセスメント・チェック、カリキュラム・コンサルティング、基盤教育、テキストマイニング

1. はじめに

岡山理科大学においては、2018年度からカリキュラムアセスメントポリシーに基づき全学でカリキュラムアセスメントとカリキュラムアセスメント・チェックを実施している。カリキュラムアセスメントの評価項目の一つとして卒業予定者に対してグループヒアリング形式のカリキュラム・コンサルティングがある。2019年度は卒業生を輩出する全学部・学科の卒業予定者からカリキュラム・コンサルティングを実施した。学生から得られた全学の教育に対する率直な意見をカリキュラムアセスメント・チェックにより全学部・学科の教育改善に利用している。

しかし、ヒアリングによって収集した多数のテキストデータに関して客観的な全体傾向の把握は行われていない。

表1 本稿で使う語句一覧

用語	解説
カリキュラム・コンサルティング	学科・専攻毎の卒業・修了を控えている学生に対して4年間のカリキュラムを振り返り、カリキュラムの長所と改善点に関する意見聴取とその割合を調べる取り組み
カリキュラムアセスメント	各学科・専攻の所属学生がDPを満たして卒業・修了したかどうかの自己点検・評価
カリキュラムアセスメント・チェック	各学科、専攻が行った自己点検・評価を他学科の教員等がエビデンスを基に説明し、他学科等の教員が他者評価を行いフィードバックする取り組み
カリキュラムアセスメント・チェックリスト	カリキュラムアセスメントを行う際の評価項目や手法を学科・専攻毎に一覧表にしたもの

そこで、カリキュラム・コンサルティングに関して、その意義、実施方法や教育的効果に

ついて詳述する。また、ヒアリングによって収集した多数のテキストデータに関して、客観性を担保しながら、学生たちからの個々のメッセージを生かしつつ、全体的な傾向をとらえて外国語教育と共通教育（2021年度から外国語教育と共通教育と併せて基盤教育へ変更するため、以後基盤教育とする）の教育改善に役立てるために、テキストマイニング分析を試み、その結果と今後の課題についても詳述する。なお、本稿で使う語句の説明を表1に示す。

2. カリキュラムアセスメント・チェック

カリキュラムアセスメント・チェックでは、各学部・学科に所属する教員が、自学科が掲げている「卒業認定・学位授与の方針（ディプロマポリシー DP）」を全ての卒業生が満たして卒業しているかという DP 達成度を卒業研究発表、卒業予定者アンケート、単位取得状況、進学・就職状況やカリキュラム・コンサルティングなどのデータを利用して自己点検評価を行い、自学科のカリキュラムや授業運営が適切であることを毎年チェックするものである。自己点検評価を他学科の教員たちに発表し、他者評価を受けて、今後の学科の教育改善に役立てることを目的に実施している。

学校教育法施行規則が改正され、2017年からはすべての大学で3つのポリシーの策定、公表が義務化された。しかし、教育改善のためのPDCAサイクルの実現には、カリキュラムアセスメントポリシーの策定と毎年実施するチェック体制が必要である。それについては、すでに2014年の教審答申で言及され、すべての大学への導入が期待された¹⁾。また、2018年4月からの第3期認証評価では、内部質保証の体制化と実現が必須となっている²⁾。つまり、カリキュラムアセスメント・チェックの実施は全国の大学に奨励されているが、実際にカリキュラムアセスメントやカリキュラムアセスメント・チェックをカリキュラム・コンサルティングも含めて体系的に実施している大学はほとんどないのが現状である。

本学では、カリキュラムアセスメントとカリキュラムアセスメント・チェックを2018年度に試行し、2019年度から本格的に実施するとともに、その評価項目としてカリキュラム・コンサルティングを導入している。

3. カリキュラム・コンサルティングの実施方法

3-1 カリキュラム・コンサルティングについて

カリキュラムアセスメントを実施し、教育改善のためのPDCAサイクルを回すためには、多面的な評価項目でチェックする必要がある。本学では、卒業研究発表のルーブリック評価、授業成績（GPA）、学生によるDP達成度の自己評価である卒業予定者アンケートやカリキュラム・コンサルティングなど最低限の項目については教育推進機構・教育開発センターが設定し、それ以外の項目、例えば国家資格合格率や教員採用率などは学科主導で設定している。

カリキュラム・コンサルティングは、卒業を予定している学生からの学科カリキュラムに対する生の声をグループヒアリングによって引き出す方法であり、2018年度は卒業生を輩出している学部から1学科を対象に行い、2019年度には全ての学部・学科、研究科・専攻（試行）で実施した。このカリキュラム・コンサルティングは、卒業を予定している学生に課程（学科等）ごとに集ってもらい、入学から卒業までの受けてきた基盤教育、専門教育、

ゼミ活動、卒業研究、実験・実習・フィールドワーク等を含む)において、それぞれの授業やカリキュラムの構成などの良かった点や改善点についてコンサルティングしてもらうものである。その結果を取りまとめて学部・学科にフィードバックしてカリキュラムアセスメント・チェックに利用してもらっている。カリキュラム・コンサルティングの目的は、カリキュラムアセスメントに学生の視点で学部・学科の専門教育や基盤教育のカリキュラムや授業の評価を取り入れることで、学科カリキュラムや授業の改善に資することである。

カリキュラム・コンサルティングでファシリテーション役は、学生たちから本音を聞き出すために全学のFDを担当する教育開発センター員(教員)と教育企画課の職員が教職協働で担っている。これらメンバーにより、学生が洗い出してくれたカリキュラムの長所と改善点を入力し、総合的にまとめた上で学部・研究科にフィードバックを行い、それらを基に学科や研究科はカリキュラムアセスメントを行う仕組みとなっている。

3-2 カリキュラム・コンサルティングの具体的な実施方法

カリキュラム・コンサルティングに参加する学生の選定は、所属する学科に依頼した。選出された学生に偏りがないように卒業予定者数の50%程度を目標にした。在籍数の多い学科では25%以上を目標に学生の選出をお願いした。学生の選出においては、特定の学生に偏らないよう各学科に配慮してもらった。ヒアリング時間は約90分であり、インタビュアーは教育開発センター員、教育企画課職員と教育デベロッパーの教員3~5人とし、進行係は教育開発センター員や教育企画課職員が担当する。インタビュアーの教員は、自分が所属する学科のカリキュラムコン・コンサルティングには参加できない。その理由は、参加した学生の自由な発言を妨げることが懸念されるためである。ヒアリング資料として、卒業予定学生用の学科カリキュラム表、基盤教育カリキュラム表と、ヒアリング結果を貼るための大きな模造紙、学生が意見を書くための付箋紙(青、赤色)などを用意した。学生を4~6人のグループに分けて、グループで作業やディスカッションを行った。

まず、学生へカリキュラム・コンサルティングの目的、カリキュラムや授業の改善に役立てるために実施すること、年度末に学科の教員が参加するカリキュラムアセスメントで必ず利用することを丁寧に説明し、率直な意見を述べてもらうこと、先生個人への誹謗中傷は行わないことなど約束ごとを決めた。

コンサルティングの内容は1) 専門教育について、2) 基盤教育について良かった点と改善してほしい点について、まず個人でそれぞれ青色の付箋紙(良かった点)と赤色の付箋紙(改善点)に書いてもらった。専門教育については、授業・演習、実験・実習、ゼミ、卒業研究について具体的なコメントを得ることができた。例えば、「△△学の授業は、授業は厳しいが、基礎的な知識が身についたので就職試験のときに役立った。」「〇〇実験では、レポートを丁寧に添削してくれたので、レポート作成能力がついた。」「〇〇学Ⅰ、Ⅱは、Ⅱの方が基礎的な内容なので、順番を入れ替えた方が良い。」「〇〇学と◇◇学の授業内容が重複している部分があるので整理した方が良い。」などである。個人で書き出す時間は10~15分程度であった。次に、グループ内で意見の共有を行い、同じない内容の付箋紙をグルーピングさせた。グルーピングした内容について、グループ内で意見分布を取り、付箋紙に4/4(4人グループで4人とも同じ意見である場合)のように記入する。インタビュアーは学生がグルーピングした付箋紙を回収して、教室の壁に張った模造紙に内容を分類して貼り付け

た。

同様に基盤教育やキャンパスライフについても同様の手順で行った。2019年度のカリキュラム・コンサルティングでは、クォーター制とギャップターム活用についての意見を聴取した。

カリキュラム・コンサルティングでは学生たちがリラックスした雰囲気の中で自由に発言できるように工夫を凝らした。

4. カリキュラム・コンサルティングによる改善例と教育効果

2018年度のカリキュラム・コンサルティングの結果をもとに、学科でFD活動を行い、2020年度のカリキュラム改善に利用したケースも既に出ている。例えば、ある学科では学科の基礎的な科目の実質的な充実を図るために、授業時間数を増やしたケースも見られた。また個々の授業においても、学生の率直な意見によって担当教員が授業方法や内容の見直しを実施しているものと考えられる。教員にとっても授業に対する評価が分かりやすい言葉で表現され、学生全体の中でどれくらいの割合が同じように感じているかなどを知ることができ、質的、量的なデータを得る貴重な機会となっている。

専門教育に対するコンサルティングについては、各学科にフィードバックを行い、カリキュラムアセスメントにおいて、各学科の自己評価に活かせることができた。このカリキュラム・コンサルティングを含めたカリキュラムアセスメントやカリキュラムアセスメント・チェックは継続的に実施し、その有効性を検証する必要があるが、カリキュラムアセスメントポリシーの策定、カリキュラムアセスメント・チェックリストの作成とリストの評価項目の実施、全学的なカリキュラムア

a) グループワークの様子



b) 付箋紙を参加学生が閲覧している様子



c) 付箋紙（青色が良かった点、赤色が改善点）

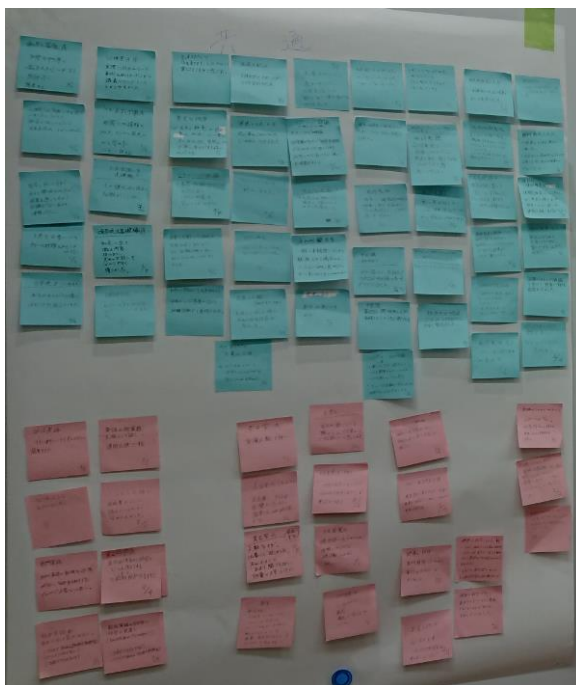


図1 カリキュラムコンサルティングの様子

図1 カリキュラムコンサルティングの様子

セサメント・チェックの実施など一体的な体制の整備と実現により、教育の PDCA サイクルを機能させるための基盤が整ったと認識している。

また、2018 年度のカリキュラム・コンサルティングにおいて、クォーター制に対する反対意見が多くみられたために、2019 年度には新たに質問項目としてクォーター制の良かった点と改善点を追加した。これらの意見と教員からの意見により、2019 年度は学期制の見直しの議論を行い、2021 年度からクォーター制からセメスター制への移行が決定した。このようにカリキュラム・コンサルティングは、全学の教育改善にも貢献している。

また、カリキュラム・コンサルティングは教育課程の改善に活用するだけでなく、学生自身が自らの学びを振り返り、学習成果を自覚する機会を得ることで、在学中の学びの意義を卒業時点で明確にすることができる点にも特徴がある。特に、学生からのコメントとして「友達と学科のカリキュラムや授業について話せてとても良かった。」「同級生とグループワークで数年間の学びを深く掘り下げることが、有意義であった。」などが寄せられ、学生にとっても大学の学びの振り返りができたことからカリキュラム・コンサルティングが学生の教育効果の面でも大変有意義であると考えられる。

さらに、教育開発センター員（教員）と教育企画課の職員が教職協働で取り組むことによって、教育改善に対する意識の共有が図れることが明らかになった。

5. テキストマイニングによる解析

5-1 解析方法

今回のコンサルティングを通してカリキュラムに関連する学生のコメントを多数収集することができた。これらの多数のテキストデータは、専門教育、基盤教育、学期制などのテーマに沿って集められたもので、記述内容も個人的な感想から具体的な要望まで非常に多岐にわかっている。すべてのコメントから客観的な傾向を把握することは困難である。また、コメントを総括しようとするれば、インタビューアの恣意的な解釈が影響して客観的なものにはならない危険性が存在する。そこで、自由記述を対象としたテキストマイニング分析方法として KH Coder を利用してカリキュラム・コンサルティングで得られたコメントの解析を実施した³⁾。KH Coder とは、アンケート自由記述、インタビュー記録など、テキスト型（文章型）データを統計的に分析するために制作されたフリーソフトである。テキストマイニングは、教育学、社会科学、医歯薬看護学や工学など様々な分野において広く活用されていて、教育学分野では、授業評価の自由記述の分析などに大いに活用されている^{4,5)}。

テキストマイニングでは、収集したすべてのテキストを同時に分析し、解釈を実施するが、今回実施したコンサルティングでは、大きなテーマを決めた後に、良かった点と改善点を分けてインタビューしたので、それぞれで KH Coder 分析を実施した。ここでは全学の教育改善に焦点を当てて解析を行うために、基盤教育に関する記述に関して分析を実施した。テキストデータから自動的に語を抽出し、出現頻度を確認し、それらの語間の共起関係を明らかにした。共起ネットワークのコマンドを利用して、出現パターンの似通った語を線で結んだ図を作成し、抽出した語の共起程度の強さの程度を明らかにした。分析条件として最小出現数を 10 に設定し、出現数の多い抽出語間の共起について解析を行った。ネットワーク図において、出現数が多いと円の半径が大きく表される。円の色分けは、その語がネットワ

ーク構造の中で中心性が高くなると色が濃く表される。円と円の結線の太さはそれらの語間の共起関係の強さを表している。共起ネットワークの結果から、分析者は特徴的な記述であると判断した関係を汲み取って、学生コメントから抜粋をしながら要約を行った。なお、学生コメントの抜粋については、KWIC コンコーダンス(上位の抽出語がどのような文脈の中で利用されているかを調べること)のコマンドを用いて、原文の文脈を考慮した。

5-2 テキストマイニング分析の結果

基盤教育科目において、どのような授業が良い授業なのか、どのような授業で改善が必要なのかについてテキストマイニング分析によって、それらの傾向を明確化して、教育改善に繋げていく方策を検討した。

1) 基盤教育の良い点について

「基盤教育の良い点に関する学生コメント」における語の出現頻度についての傾向は、「先生」が105回と最も多く、「できる」96回、「学べる」84回、「社会」75回、「する」73回、「授業」68回、「基礎」67回、「楽しい」66回、「英語」62回、「なる」58回、「役に立つ」52回、「文章」42回、「やすい」39回、「企業」39回、「面白い」35回の順となっている。この出現語を見ると学生が基盤教育の良い点が浮き彫りにされていると考える。特に

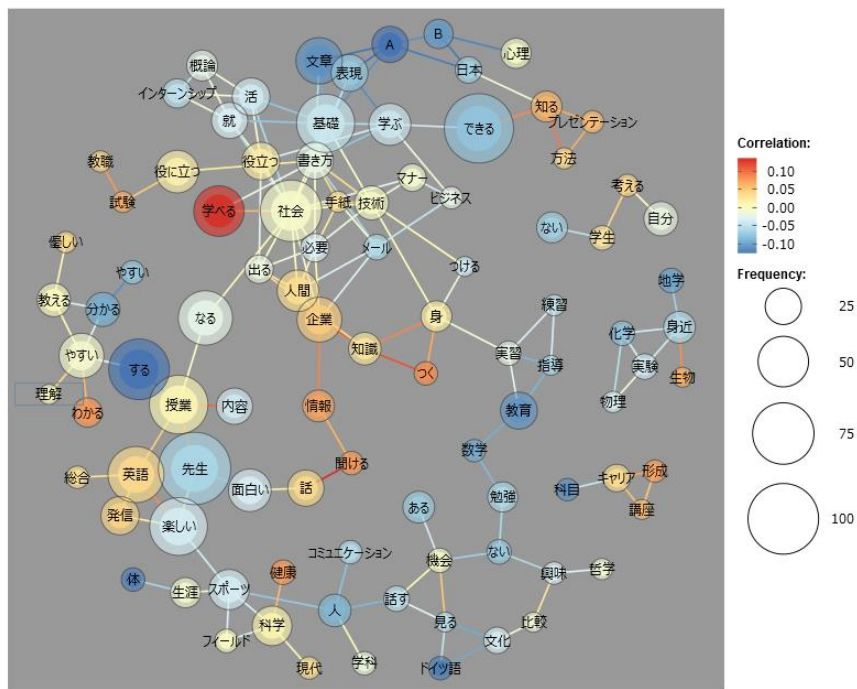


図2 基盤教育の良かった点についての共起ネットワーク

「できる」については、「知ることができた」、「活用することができた」、「コミュニケーションをとることができた」、「深めることができた」、「基礎をまなぶことができた」、「実験ができた」、「意識することができた」、「興味を持つことができた」、「模擬授業ができた」、「実

感できた」、「精神的に成長できた」、「考えることができた」、「身につけることができた」、「理解できた」、「考えに幅ができた」、「挑戦できた」、「中国語で自己紹介できた」など学生は授業に達成感を求めていることが分かる。

次に、基盤教育の良い点に関する学生コメントの分析から得られた共起ネットワークを図 2 に示す。いくつかのクラスターが出現しているが、出現パターンの似通った語を線で結んでできたクラスターであるので、クラスター内には強い共起関係があるが、クラスター間にも共起があることも注意しなければいけない。いくつかのクラスターから基本的概念を抽出して分類すると 4 つのカテゴリー ①先生の授業力と授業内容の面白さ ②社会で役立つ ③コミュニケーション ④体験するに分けられた。以下に、この 4 つのカテゴリー毎に分析結果を述べる。

① 先生の授業力と授業内容の魅力

基盤教育の良い点については、「先生の話や授業の内容が面白かった。」という記述が多いことが分かる。先生の熱意、わかりやすい説明や映像教材の利用などの授業の工夫に対して学生は授業が楽しく感じて、その授業への興味関心が高くなったと述べている。「発信英語」のように高校では習わない会話中心の授業やネイティブの先生による授業は楽しいとの記述が多い。「教える」「分かる」においても先生から丁寧に分かりやすく教えてくれることに良い印象を持っていることが分かる。

② 社会で役立つ

「社会」「学べる」「基礎」では、社会人として必要な基礎や技術を学ぶことができたと考ええる学生が多いことが分かる。具体的には手紙やメールの書き方、ビジネスマナーなど高校では学ばない内容を学んだことや企業の人の話を直接聞く機会を得たことが良かったことで、その成果として就職活動に役立ったと記述している。

③ コミュニケーション

基盤教育では、学科の専門教育と違い、他学科の学生と一緒に授業を受ける機会が多いということである。「他学科の学生と交流を持てて楽しい」「知らない人と話したり、課題に取り組むグループワークがあったり、就活に役立った」などの記述も見られる。

④ 体験

生涯スポーツ関連の授業では、フィールドに出て体を動かすことの楽しさを知ったという意見が多かった。健康関係の授業では、「自分の生活を見直すチャンスになり、楽しかった」というコメントがあり、実生活に密接した授業内容に関心を持っていることが分かる。また、現代人の科学では、授業中での演示実験や体験実験に面白みを感じることも分かった。

2) 基盤教育の改善点について

「基盤教育の改善点に関する学生コメント」における語の出現頻度についての傾向は、「ない」が 192 回と最も多く、「する」110 回、「先生」76 回、「英語」72 回、「授業」72 回、「多い」47 回、「基礎」38 回、「単位」36 回、「総合」31 回、「科目」30 回、「テスト」29 回、「ほしい」28 回、「教科書」28 回、「内容」26 回、「わかる」24 回などとなっている。この出現語を見ると学生が基盤教育の改善点としてもとめていることが明らかにされると考える。特に「ない」には「分からない」「面白くない」「やる気がでない」「授業がと

れない」「説明がない」などの記述がある。学生が求めているものが満たされていない状況を反映しているものと考えられる。

基盤教育の改善に関する学生コメントの分析から得られた共起ネットワークを図3に示す。いくつかのクラスターから基本的概念を抽出して、5つのカテゴリ①受講生が多い、履修制限 ②学ぶ目的意義、評価基準の曖昧さ ③授業内容の学生の理解度への配慮、授業方法の改善 ④教科書、場所的問題を設定し、分析を行った。

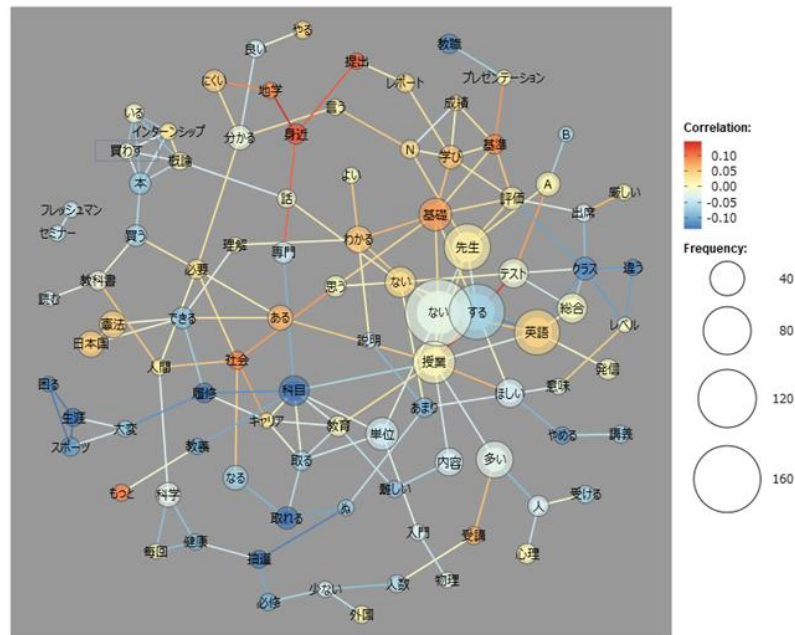


図3 基盤教育に関する改善点についての共起ネットワーク

① 受講生が多い、履修制限

「授業の受講生の人数が多い」と多くの学生が指摘していることが読み取れる。このような指摘は、基盤教育の科目では、これまで学生から指摘されていたことである。日本国憲法、心理学、考古学、身近なシリーズなどの科目を挙げて、人数の多さにより「授業が受けづらい」「窮屈」「先生の話が聞こえにくい」など教育環境が良くないことが分かる。

また、「ほしい」には基盤教育科目の履修制限をやめてほしいとの要望が多く寄せられた。

「抽選で取れず、必修なので焦った」、「全体的に抽選で取りたいタイミングで取れず、後々困った」など学生が履修希望をしても受講できない授業があったとの記述があった。「抽選をするのであれば開講数を増やしてほしい」との要望もあった。

② 学ぶ目的意義や評価基準の曖昧さ

最も出現頻度の高い「ない」に関連して、学ぶ目的や意義が分からないとの記述があった。「何のために学んでいるか分からない」、「目的がよくわからない」、「高校と同じことを大学で学ぶ意義がない」など、授業の目的、目標の説明がないことに対して改善要望があった。また、成績評価基準が明確でないとの記述も多くみられた。「評価の基準が良く分からなかった」、「評価基準の曖昧い」「【同じ名称の科目なのに】評価基準が教員によってまちまちだった」、「明確な評定基準がわからず不安な気持ちになった」などの記述があり、成績評価基

準の説明があまりなされていない授業があることが分かった。また、試験についても「授業のテストがクラスによって差があった」「英語科目でのクラス分けと評価」についての改善を求める記述もあった。

③ 授業内容の学生の理解度への配慮、授業方法の改善

学生の理解度への配慮が足りないことに対する改善要望があった。「授業内容が難しすぎる」「授業の内容がわかりにくかった（説明が多く板書があまりない）」「講義内容が理解できなかった」「レポートの形式やレポート内容について全員がちゃんとわかるようにしてほしい」「説明が少なすぎてよくわからないことが多かった」などの記述から分かりやすい授業が求められていた。

また、授業内容については、「内容がなかった」、「内容が簡単すぎた」、「内容が薄かった」や「もっと一般教養的な内容にしてほしい」などの不満も見られた。授業方法に関しても、教員に工夫を求めるものが見られた。「教科書をただ読むだけの授業で先生がいてもいなくても関係ない」授業があったとの意見も寄せられた。文系科目に対して「理学部にもわかりやすく理解できるような映像とかが欲しい」、グループワークに対しても「もう少し一つの取り組みや授業を丁寧に実践あるいは説明ほしい」など授業方法に対する要望もあった。

④教科書問題、場所的問題

教科書については、教科書を買わされたことと教科書を購入する必要性が分からないとの記述が多くみられた。「教科書を買ったのに使わない授業が多い」、「強制的に教科書を買わされた」、「教科書を買わせて、授業ではそれをただ読むだけ」など不満が多く寄せられ、教科書の「強制的な購入はやめてほしい」、「授業で使用しない教科書は買わせないでほしい」などの要望があった。教科書購入と単位修得に関係があったとの記述もあった。

「生涯スポーツ」では実施場所の遠さに不便を感じている学生が多くいることが分かった。「雨の日には行きたくない」、「移動に時間がかかって開始時間に間に合わないことがあった」などの意見が寄せられた。

6. 考察

テキストマイニング分析結果から、基盤教育の良い点については、①先生の授業力と授業内容の面白さ、②社会で役立つ、③コミュニケーション、④体験する楽しさの4つに分類された。

①については、「先生の話が楽しい」「授業の内容が興味深い」「授業方法を工夫している」など“先生の授業力”をしっかりと評価していることが分かる。また、学生が分かる授業を実践することでやる気が増し、自ら学ぼうとすることで学生が学びに対しての楽しさや面白みを獲得しているものと考えられる。

②については、学生が、基盤教育のキャリア教育に大いに期待していることが分かる。社会人として必要な基礎や技術を教え、将来に役立つ授業を展開できているので学生の満足度も高いものと考えられる。

③については、基盤教育科目の授業では他学科の学生との交流をすることが楽しいと考える学生が多くいることが分かった。グループワーク（スポーツでのグループ活動も含む）やディスカッションをするなどアクティブラーニング授業が高く評価されていることが分

かる。

④については、基盤教育科目においても、座学で聞くだけでなく、学生自身で考えたり、体験したりする参加型授業を望んでいることが分かった。

改善点については、①受講生が多い・履修制限、②学ぶ目的意義・評価基準の曖昧さ、③授業内容の学生の理解度への配慮・授業方法の改善、④教科書・場地的問題の4つに分類された。

①については、大人数授業の問題は、基盤教育科目が抱える大きな問題であり、解決しなくてはいけない問題である。新しい基盤教育では、受講生の定員を100人程度にする予定といわれているが、クラス数の増加に伴う人的資源の問題や教室数の問題も起こると考えられる。

2020年度の春1学期の授業アンケートでは、コロナ後の授業の形態について、対面授業希望者が33%、オンライン授業希望者が22%、対面授業とオンライン授業の併用希望者が30%であり、すべての学生が必ずしも対面授業を望んでいる訳ではないことが明らかになった。大人数の対面授業は授業担当教員の負担が大き過ぎるだけでなく、学生の負担も大きい。VOD授業や対面とZoomを併用することで、大人数の学生の受講も可能で、対面授業と同等の教育効果も期待できるなど新しい授業形式を考えてもよい。

②については、授業の目的、目標の説明がないことに対する改善要望に対して、教員は学生にシラバスの活用を呼び掛けることが必要である。学生の学びのモチベーションを維持するためにも学ぶ意義についてはしっかりと説明することが大切なことである。評価基準が分からない授業においても、シラバスの成績評価に従って評価すべきである。また、授業の中でも評価基準を詳しく説明する必要がある。

③については、学生の理解度を把握して授業を展開することが必要である。そのためにも、一方的な伝達型の授業ではなく、双方向性のある授業を展開するなど授業方法の改善が求められている。

④の教科書の使用においても、教科書選定の理由を明確にして、授業では積極的に利用して、学生に納得してもらう必要がある。また、生涯スポーツの実施場所が少し離れた笹ヶ瀬グラウンド、体育館であることから場地的な問題であるのは事実であるが、早急な対応は難しい状況である。

以上の基盤教育に関する分析結果は、基盤教育センターにフィードバックすることで、2021年度から始まる新しい基盤教育の構築に向けて、良い点はさらに伸ばし、改善点については今後の改善方策を検討するときの参考になる。さらに、学部・学科は、カリキュラムアセスメント・チェックを実施することで、教育改善のPDCAをサイクルさせていることに対して基盤教育においては、まだ実現できていない。新しくできる基盤教育センターは、基盤教育の改善を実施するために、カリキュラムアセスメント・チェックへ参加する必要があると考える。

6. まとめ

カリキュラム・コンサルティングの意義、実施方法と教育における改善例および教育的効果について報告した。専門教育に対するコンサルティングについては、各学科にフィードバックを行い、カリキュラムアセスメント・チェックにおいて、各学科の自己評価に活かすこ

とができた。

カリキュラム・コンサルティングは学期制の見直しのきっかけにもなり、全学の教育改善にも役立った。さらに、学生にとっても友達と一緒に大学の学びの振り返りができたことから学生への教育効果もあることが明らかとなった。

また、カリキュラム・コンサルティングでは、職員もファシリテーター役として自分の業務経験を活かせることから教職協働の取り組みとして有効であることが分かった。しかし、基盤教育に対するコンサルティングについては、これまで分析が行われず、カリキュラムアセスメント・チェックが実施されていない。カリキュラム・コンサルティングを基盤教育の教育改善に活かすために、テキストマイニング分析を利用して、全体的な傾向について共起ネットワークにより可視化することで、客観化と解析を行うことが必要である。

参考文献

- 1) 中央教育審議会 (2014) 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について (答申)」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf
(accessed 2020-08-20)
- 2) 大学基準協会 (2016) 「第3期認証評価における大学評価の実施ガイド」
https://www.juaa.or.jp/common/docs/symposium/university/symposium/h28/common_document_03.pdf
(accessed 2020-08-20)
- 3) 樋口耕一 (2014) 「社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して」ナカニシヤ出版
KH Coder について チュートリアル、ダウンロードサイトなど
“KH Coder”. <http://khc.sourceforge.net> (accessed 2020-08-20)
- 4) 齋藤朗宏 (2012) 「日本におけるテキストマイニングの応用」The Society for Economic Studies The Society for Economic Studies The University of Kitakyushu Working Paper, Series No. 2011-12
- 5) 越中康治、高田淑子、木下英俊、安藤明伸、高橋 潔、田幡憲一、岡正明、石澤公明 (2015) 「テキストマイニングによる授業評価アンケートの分析：共起ネットワークによる自己評価の可視化の取り組み」、宮城教育大学情報処理センター研究紀要、COMMUE(22)、pp. 67-74.